

佐渡初の前方後円墳で最古の古墳の発見、しかも2基

—佐渡市「秋津古墳群」（仮称）の発見、確認について—

文化財保存新潟県協議会（文新協）

- ① 当会会員の石崎悠人（ひろと）氏が国土地理院発行の最新の地図情報をパソコンのソフトで画像処理していたところ、佐渡市秋津に所在する両津郷土博物館の近く、加茂湖に面する台地上において、前方後円形2か所、円形4か所の土地の高まりを発見した。
- ② 4月21日、当会会員4名で現地を踏査したところ、前方後円墳2基と円墳4基を確認した。
- ③ 古墳は平坦面を中心に台地から派生する尾根にかけて近接して点在、分布する。
- ④ 前方後円墳2基は共に全長30m程度の中小規模のもので、高さは後円部が2m弱、前方部が1m弱の低い特徴をもつ。円墳は最大18m前後、高さ2mほどの小型のものである。いずれも小規模な周堀を伴っている。
- ⑤ これまで佐渡では確実な前方後円墳の存在は知られていなかった。すなわち、今回の発見は、佐渡初の前方後円墳の確認例である。
- ⑥ 前方後円墳の形態は、後円部の高さに対し、前方部が低平で、前方部の幅が後円部直径に比して発達しない古い特徴をもつ。ちなみに、1号墳（西より）は略測の結果、全長30.4m、後円部直径が18.0m、後円部高さが1.7m、前方部長さ12.4m、括れ部幅が7.0m、前方部前端幅が9.5m、前方部高さが0.93mある。前方部は南の加茂湖側を向いている。2号墳（1号墳の東方）は全長29.2m、後円部直径は16.7m、後円部高さは1.9m、前方部長さは15.1m、括れ部幅5m、前方部前端幅8.4m、前方部高さは0.95mとなっている。前方部は南東を向いている。
- ⑦ 以上から、前方後円墳は前期古墳と推定される。
- ⑧ 今まで佐渡には古墳時代前期の集落は確認されていたが、前期古墳の存在は知られていなかった。現状では、佐渡最古の古墳は後期前半（6世紀前半）の二見半島相川に所在する台ヶ鼻古墳であった。前期はおろか中期古墳も見つかっていなかった。よって、今回の発見は、佐渡最古の古墳の年代をいっきに1世紀以上溯らせるものとなった。
- ⑨ 今回の発見で注目されるのは、今まで重視されていた佐渡ヶ島南部の国中平野ではなく、北部の目を向けられていなかった両津湾側である点である。
- ⑩ 特に、その立地が加茂湖に面した台地上にあることは重視される。加茂湖は洪水対策のため明治5年に淡水湖（潟）の砂州の一部を切って現在海水（鹹水）が入っている。その加茂湖の成因を考えると、古墳時代当時は両津湾の奥部に季節風と扇状地からの砂の供給で砂嘴（さし）が南東・北西から伸び、それが発達して砂州が形成され、それが完全には閉じず狭いながらも切れしており（あるいは人工的に切って）、外洋の日本海から準構造船程度の船が入れる状態となっていて、波の穏やかな天然の良港だったのではないかと考えられる。被葬者はその水運の支配権を握っていただろう。古墳の付近には港を示唆する「大舟入り」の地名伝承もある。
- ⑪ 加茂湖周辺には、農業生産の基盤となる平野も形成され、その集団を経済的に支えていたとみられる。
- ⑫ 畿内ヤマト政権にとっても、東方、東北に勢力伸張を目指す上で重要視される存在で、日本海ルートで能登半島を含む北陸を介して交流を図っていたと推定される。
- ⑬ 前方後円墳2基と円墳の一部は中心部の盗掘を受けているものとみられ、盗掘坑が存在するが、盗掘坑の確認されないものもある。
- ⑭ 以上、これまでの佐渡の歴史観を根底から覆す重要な発見と評価される。
- ⑮ 今後、文新協では本格的な測量調査を実施し、その成果をもとに地元でシンポジウムを開くことを計画している。